活躍する同窓生

故郷南相馬の今を発信し続ける

ルポライター
岡　邦行さん
（二十回卒）

―『私が生まれ故郷に出向くことができたのは、JR福島駅東口前から相馬市経由の南相馬市行のバスが運行されるようになってからだ。3・11から2ヶ月後の5月初旬、いたたまれない気持ちで故郷の現実を目の当たりにした。』―

こんなふうにして、3・11以降、ここに暮らす野球少年達や高校野球部の選手達の姿を丹念に取材した本があります。『南相馬少年野球団　フクシマ3・11から2年間の記録』（ビジネス社）です。これを書いたのは、岡邦行さん。原町高校の同窓生です。フリーのルポライターとして多くの著書を書いている岡さんにお話を伺いました。

大学2部での貴重な経験

岡さんは、高平小学校、原町第二中学校の出身でご実家も原町区にあります。高校時代は3年間硬式テニス部に所属し、3年生の時はインターハイに出場しています。このテニス部での活動が高校時代の一番の思い出といいます。しかし「勉強の方は今ひとつ、こっそりちょっと悪いことも・・・」という『素行不良』の生徒であったとはご本人の弁。担任の佐藤久孝先生は、そんな岡さんを見て見ぬ振りをして見守ってくれていました。その先生も3・11後の避難所生活のため健康を害しお亡くなりなった、それがとてもショックだったと言います。

法政大学社会学部に入学。1，2年次は2部（夜間部）、3年から1部に転部しますが、この2部での2年間が貴重な経験になりました。銀行員や自衛隊員、体育会系の有名選手や大手企業のサラリーマン、とにかく色々な人が学生として周りにいる。そして自分もまた、掃除夫や酒場等でアルバイトをする中、多くの人からさまざまな人生を教わることになります。

この大学時代に、読むこと・書くことに興味を持つようになります。ルポライターとしてものを書く、そのきっかけが芽生えたのです。都内の出版社を経験したのち、フリーのルポライターとなり、50歳を迎える1999年に『野球に憑かれた男』で、報知新聞社主催の「報知ドキュメント大賞」を受賞しています。

『南相馬少年野球団』

『南相馬少年野球団』では、3・11の地震・津波・そして原発事故の後、野球少年達がどのような現実の中で暮らさねばならないか、そんな子ども達に何とかして野球を続けさせたいと苦しみ奮闘する保護者の方達、仮設校舎やサテライト校の中で部活動を続ける中学校や高校の野球部の姿、などが描かれています。暖かい視線で丁寧に子ども達の姿を伝えています。

ご自身はその日、埼玉にあるご自宅で原稿を書いていました。地震後、原町の実家に電話を入れたがどうしてもつながらない。原発のことがまず心配であったそうです。30年以上前に福島第一原発を取材したことがあり、津波の映像を見た時、すぐに「原発は大丈夫か！」と思ったそうです。

3・11以降、月に一度のペースで原町には帰ってきます。そしてつくづく思うことは「あれ、俺ってけっこう故郷が好きだったんだ。愛しているんだ。」ということでした。そして、「世界が注視する大問題」なのだから、もっともっと南相馬の現状を発信していかねばと、肝に銘じたと語っています。

原町高校にも何度か取材に来て、野球部の姿や、当時の監督・部長の先生の声、そして「相双福島」結成のこと、また、相双地区の高校野球部の様子を生徒・監督の声で紹介しています。

震災後3ヶ月たった6月、長野県上田市に遠征した原高野球部の様子が書かれています。長野県丸子修学館高校と愛知県吉良高校との3校交流戦が行われ、その時の原高の福島雄飛主将の言葉が記されています。

「去年の秋季大会の3位決定戦で負け、東北大会に出場できなかったんです。そのため、21世紀枠での甲子園センバツ大会に選出されなかったと思います。だから、避難先の新潟でセンバツ大会をテレビで観たときは『あそこに立っているはずだった・・・』というもどかしさを感じました。震災から2ヶ月後の5月8日に練習ができたときは『野球どころじゃないだろう・・・』という声もあったと思いますが、いくら不謹慎と言われようが、僕達は野球ができて嬉しかったです。目標は甲子園に行くことです。出場できることに感謝し、甲子園を狙います」

「野球ができて嬉しかった」というのは、種目は違っても、原発禍の地で部活動をする高校生誰もが感じたことでしょう。

伝え続けることが自分の使命

―ルポライターとしてばかりではなく、福島を故郷に持つ自分の使命は「現状を多くの人に知らせること」だと思っています。命のあり方を考えなければならない、そのためにも現場からこの原発問題を発信することが大切だと思っています。

―南相馬に来てたくさんの少年、高校生と会い、話をして感じたことがある。

よく、「いまどきの若者の考えは軟弱だ」というけれど、いやいやそうでもないぞ、と感じます。高校生達は、3・11以降のことを結構冷静に見ている、真剣に考えているのではないでしょうか。僕の高校時代と比べたら、たぶん4、5歳は大人になっている。自分達の頃よりずっと大人になっていると感じています。色々な場で、高校生の言っていることを聞いて少なからず安心したからです。その高校生の考えを、私達大人はくみ上げてやらなくてはならない。「若い高校生の力はすごい」と思う。原町高校応援歌にある「原高健児」はこんなもんじゃない。未来に向かって「立ち上がれ、原高健児！」です。

母校の近況

柏曜祭 伊豆大島へ募金

公開文化祭「柏曜祭」開催

9月7日(土)8日(日)の両日、3年に一度の原町高校文化祭「柏曜祭」が開催されました。震災後初めての公開文化祭の今回のテーマは『彩幻～新たなる幕開け～』。震災後の初めての文化祭、新しいものを築き上げたい＝「再現」。その漢字からイメージしたテーマです。

初日の仮装行列、翌日の一般公開と、各クラスや生徒会・文化部、そしてPTAのみなさんが文化祭を盛り上げました。

今年のポスターは、制服姿の原高生がかけ出していくというデザインで、若いエネルギーを感じさせます。

PTAではこれと同じ記念缶バッジを製作し、全生徒・教職員に配布しました。

一般公開では、カフェ、お化け屋敷等のクラスの催し、文化部の作品展示、生徒会は震災から今まで届いた支援物資やメッセージを掲示するなど、14クラス、生徒会・文化部、有志など12団体合計26の団体が参加しました。PTAも、カレーライスの出店で参加し、予定を大幅に越える900食を提供しました。1500名を越える来場者をお迎えし、生徒達はそれぞれの役割を十分に果たし、柏曜祭は成功の内に終わりました。

伊豆大島へ募金活動

伊豆大島を襲い、大きな被害をもたらした台風26号。原町高校生徒会は、3・11の時全国からいただいた支援をお返ししよう、と募金活動に取り組みました。3・11の時は大島高校から日本赤十字を通して義援金をいただいていました。今回、校内で全校生・教職員に呼びかけ、また、11月14日の休日には、生徒会役員13名が市内二カ所のショッピングセンターで募金活動を行いました。集まった義援金は216,000円余りにも達し、このことが新聞で報道されると、原町高校に直接手紙で募金を送ってくださった市民の方もいらっしゃいました。また、3・11当時福島市で講師をされていて、その後東京都の教員になった福島出身の女性の先生が、この大島高校に赴任されていました。その先生からも「どうしてもお礼を伝えたい」とお手紙をいただいております。人と人のつながりを感じさせられました。

集まった義援金は伊豆・大島高校に20万円、同じく台風で甚大な被害を受けたフィリピンには1万6千円余を送ることができました。

「こんなにたくさんの募金が集まるなんて、取り組んで本当によかった」と、生徒会の生徒達は感想を述べています。今まで全国たくさんの方々からいただいた支援を、ここで少しでもお返しできたかと思います。